

熊本学園大学 外国語学部 第11号

英米学科 GAZETTE

平成30年7月
発行・編集
熊本学園大学 外国語学部

巻頭言

顔を合わせることの意義

外国語学部長 神本 忠光

同じ事を伝えるにも、媒体次第で伝わる情報量が異なる。顔を合わせた場合に伝わる情報量を 100% としよう。米国の心理学者 A. メラビアンによれば、言語情報が 7%、聴覚情報が 38%、視覚情報が 55% を占めるという。言い換えると、メールだと伝わる量は 10% 以下で、電話を使っても 50% にも満たないと解釈できる。顔を合わせる

意義は意外に大きい。

6月10日(日)に保護者懇談会が本学で開催された。午前中は学長挨拶で始まり、就職課等が種々の情報を共有した。午後からは学部単位に別れ、学部・学科の教育方針等の説明を行い、活発な質疑応答が続いた。保護者との個別相談も行った。双方向のコミュニケーションで、知らなかった学生の「顔」も見えた。年に一度の懇談会ではあるが、6、7月中の土日に沖縄を含めた九州各県を巡回する。

交換教授報告

韓国大田大学での授業

堀 正広 (教授・英語学・文体論)

2017年3月3日に姉妹大学である韓国大田大学に交換教授として赴任し、翌年3月2日に無事帰国しました。ちょうど1年前に発行された Gazette 6号に「韓国大田大学への交換教授として」と題して、着任後3ヶ月目の状況を報告しました。本号では、大田大学での授業について簡単に報告させていただきます。

大田大学での春学期は「日語日文学ビジネスコミュニケーション」という科目を担当し、秋学期は「日本の理解」という日本文化に関する授業を担当しました。大田大学での教育システムはアメリカ式で行われています。講義要項は各週の教育目標や内容をこと細かく記載しなければなりません。講義内容は文書だけでなく5分間のビデオでまとめ、公開することになっています。授業は50分で、出席は授業の開始時にコンピュータで入力します。授業は抜き打ちで大学の幹部が参観します。試験後は学生による授業評価があり、2週間後に発表されます。教員の勤務評価は、「教育、研究、役職」の3点からなり、「教育」に関しては、学生による授業評価で行われます。これは給与や昇格

などに影響し、とくに非常勤の先生は、継続雇用と関わりがあるので、大変敏感です。授業評価の質問項目は10項目あり、それぞれ10点で、満点は100点です。私の場合、有り難いことに総合的な平均点が92.31で、その学年の科目の中で一番高い評価をいただきました。

韓国での授業の準備は日本より大変でしたが、学生たちの協力もあり、充実した思い出に残る授業となりました。一年間の異文化体験と研究期間の機会をいただいで、今は熊本学園大学で新たな気持ちで教育と研究に取り組んでいます。



ゲーテ『若きウェルテルの悩み』(1774)

八木 昭臣 (准教授・ドイツ文学)

数年前に『ゲーテの恋 君に捧ぐ「若きウェルテルの悩み」』という映画が公開されましたが、教室で、ゲーテの『ウェルテル』を知っているかと尋ねても、学生達の反応は良くありません。さすがに漱石や『坊ちゃん』は知っているようですが、ドイツ文学の古典にはあまり興味がないらしく、最近ではヘッセの『車輪の下』なども「聞いたことがない」と答える学生が大半です。

ご存知のように『ウェルテル』は歴史的な意味をもつ作品です。発表当時、欧州各国語に翻訳され、熱狂的に受け入れられました。ウェルテルのまねをして自殺する人々が続出したことや、ナポレオンが繰り返し

読んでゲーテに質問したことなどはよく引合いに出されます。しかし、ゲーテを読んだ学生達には『ウェルテル』よりも牧歌的な『ヘルマンとドロテア』の方が好ましく映るようです。映画の方はゲーテの作品とも実人生とも異なっていましたが、今日の視点で受け入れやすい展開になっているのではないのでしょうか。

『ウェルテル』には初版のほかに 1787 年の改訂版があります。邦訳のほとんどは改訂版の方です。改訂版のアルベルトはより紳士的に、ロッテの心境はより丁寧に描かれています。それとともに、ウェルテルの「悩み」はいよいよ内面化し、複雑化しているようです。ゲーテは後年、エッカーマンとの『対話』の中で、時代を超えて誰もが生涯に一度はウェルテルと同じ悩みを体験するであろうことについて語っています。

Seminar in WORLD ENGLISHES

米岡 ジュリ (教授・英語学・世界英語)

Our seminar studies world Englishes (not English!). How are Englishes spoken, studied and used in different countries and regions in the world? In Japan, English is learned as an international language to communicate with people from other countries, and the same is true for our neighboring countries Korea and China. If you want to work in an airport or sightseeing spot, you will find yourself speaking English as an international language with customers from all over Asia. In other countries, such as India or the Philippines, English is a second language—an official or educational language used by citizens to talk to each other, in addition to their own native languages. We also study how English is used in cultural products such as movies, songs, and stories around the world, and how it has affected other languages such as “katakana English” in Japan (and Korea!).

Students write short research papers and present them in English, and continue them in their graduate thesis seminar. Recent topics have included everything from Philippine English literature to communication strategies in “Degawa English” ! This seminar welcomes exchange students, too, and currently we have students from Taiwan, England and Canada (who sometimes write and present in Japanese!). We also take a yearly trip to Pusan, Korea, where we have a chance to put our international English into action!



編集人 塩入 すみ (英米学科長)

〒862-8680 熊本市中央区大江 2-5-1

TEL: 096-364-5161 (代表) Mail: shioiri@kumagaku.ac.jp